

高等学校

平成 17 年 度

教育研究員研究報告書

教 育 経 営

東京都教職員研修センター

目 次

I 主題について

1 主題設定の理由	2
2 研究内容	2

II アンケート

1 はじめに	4
2 方法と内容	4
3 結果と考察	4
4 まとめ	10

III 小グループによる校内研修

1 はじめに	11
2 組織的な校内研修を推進するコーディネーターの役割	11
3 小グループで行う校内研修の流れ	12
4 事例・モデル	14

IV まとめ	24
--------	----

研究主題

「授業力」向上を目指した小グループによる校内研修とその環境整備

I 主題について

1 主題設定の理由

学校教育の中心は授業である。都民の期待に応える教育を推進していくには、教員一人一人が課題意識をもって、学校教育の中心である授業の改善に取り組んでいく必要がある。

しかし、都立高等学校では、生徒の能力・適性、興味・関心、進路希望などの多様化が進んでおり、生徒の主体的な学習を促すような教育内容・方法の工夫・改善を図る必要があるにもかかわらず、指導方法の工夫など授業改善が必ずしも十分に行われているとは言えない。

学校は、生徒や保護者のニーズに応え、すべての教員が授業改善を重ね、質の高い授業を行うことにより、生徒に質の高い教育を提供していくことが求められている。また、校長の学校経営計画に基づき、主幹制度や既存の組織を活用して、組織的に個々の教員の授業力を高めるとともに、人材育成や能力開発を行っていく必要がある。

東京都教育委員会は、平成16年9月の「東京都公立学校の『授業力』向上に関する検討委員会報告書」で、実際の授業に即した校内研修が活発に行われることは、「授業力」向上のための教員の相互研鑽を促すものとして、極めて重要であると指摘している。さらに、「都立学校の自己評価指針」（都立学校経営支援委員会）では、授業評価の結果、具体的にどのような授業改善が必要なのか、どのように指導計画を見直せばよいのか等については、校内研修等を活用し、教員相互の指導力を共有するとともに、学校の教育課題に対して組織的に対応することのできる指導力の向上を図ることの必要性を指摘している。

そこで、本研究部会では、教員一人一人の自己の「授業力」を一層向上させるとともに、学校全体の教育の質の向上を図るため、効果的な校内研修体制を確立する方策について検討することとした。特に、限られた時間・人材を有効に活用し、各教員が実践的に取り組める方策を提言する必要がある。具体的には、教員同士が、日常的に授業を見合い、現在行われている教科会・学年会などの既存の組織を再構築し、効果的・効率的な校内研修体制を確立できないかと考え、「学年会や教科会などでの小グループを活用し、授業を『見る』『見られる』校内研修を行えば、教員一人一人の授業改善・充実が図られ、学校全体の教育の質が向上し、生徒の学力がより一層向上するであろう。」という仮説を立て、研究を行うこととした。

（「図1 研究構想図」参照）

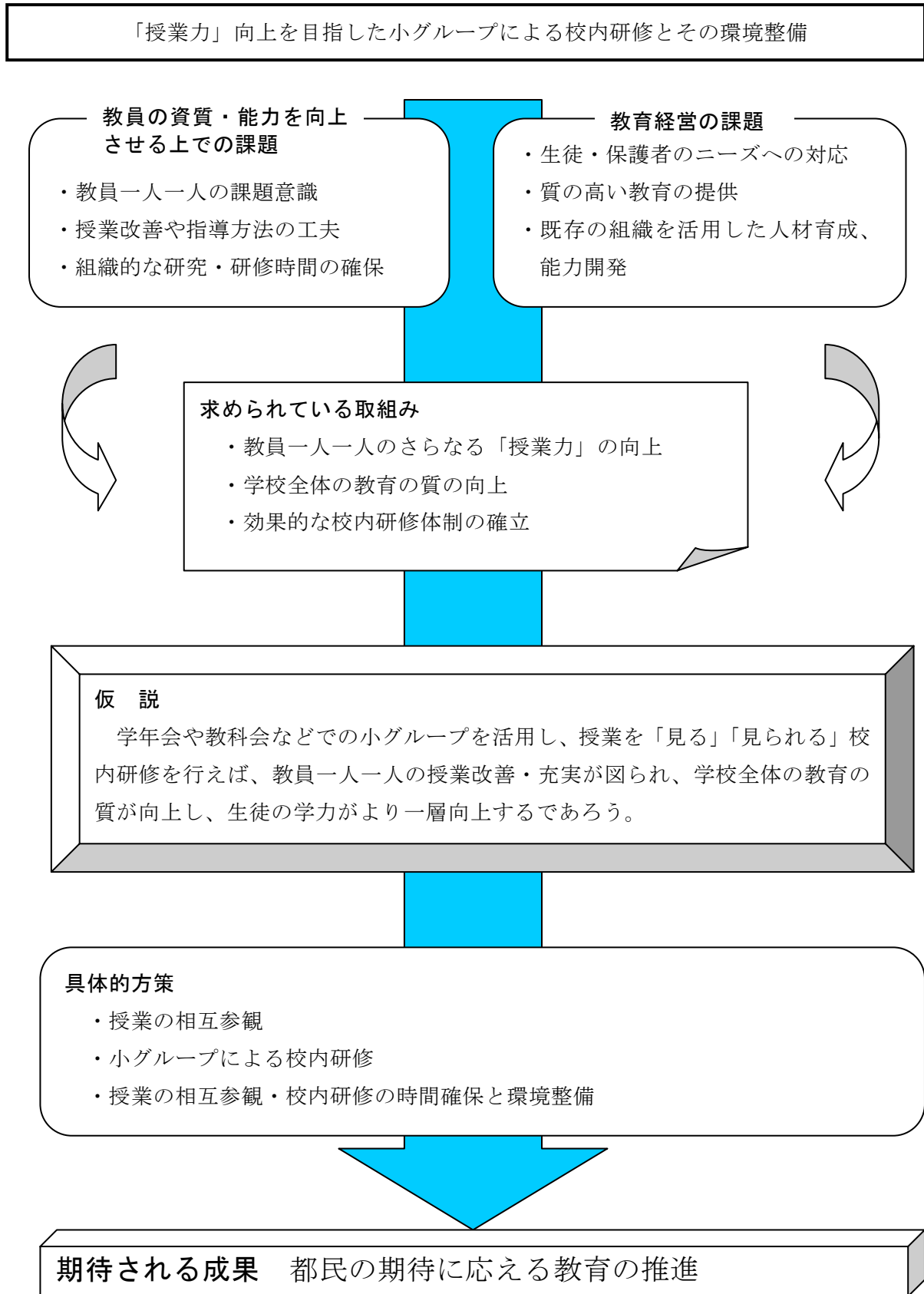
2 研究内容

本研究では、仮説を検証するために、基礎研究として、都立高等学校における校内研修の現状及び校内研修の考え方についてのアンケート調査を実施し、分析・考察した。

その上で、実践研究として、今後の望ましい校内研修の在り方についての研究を行った。

図1 研究構想図

研究主題



II アンケート

1 はじめに

本研究部会では、校内研修の現状及び校長と教員の校内研修に対する考え方を調査し、効果的な校内研修の在り方を検討するため、アンケートを実施し、分析・考察した。

2 方法と内容

本研究部会の部員 5 名が所属する都立高等学校を中心に、校長と教員に対してアンケート調査を実施した。特に教員については主幹と教職経験年数を 1～3 年、11～15 年、21～25 年、31～35 年に分け依頼した。また、アンケート項目は以下の 4 点を中心に実施した。

【主なアンケート項目】

- (1) 校内研修の実態について
- (2) 「授業力」に関する意識について
- (3) 勤務時間の仕事の割り振りと不足感について
- (4) 効果的な校内研修の在り方について

その結果、表 1 に示したように、都立高等学校 33 校の校長と教員 145 名から回答を得ることができた。

表 1 回答学校数と教員数

学校数	33 校
校長	22 名
主幹	31 名
1～3 年目	22 名
11～15 年目	19 名
21～25 年目	30 名
31～35 年目	21 名
合計	145 名

3 結果と考察

(1) 校内研修の実態について

調査した学校の校内研修がどの程度行われているかの実態を把握するために、「学校全体として、授業評価を含めた授業に関する校内研修の昨年度の実施回数」について質問したところ、年間で平均 3.2 回実施されていた。

次に、学校全体としての授業に関する校内研修以外での話し合いの機会について知るために、「学年会、教科会での授業に関する話し合いの機会」について質問したところ、表 3 に示したように、授業に関しての話し合いは教科会において実施されている割合が多く、「ほぼ毎回」と「よくある」を合わせると 74.4%であった。

また、「学年会や教科会以外で、授業に関して話し合う機会」につ

表 2 学校全体として、授業に関する研修を昨年度は何回実施されましたか。

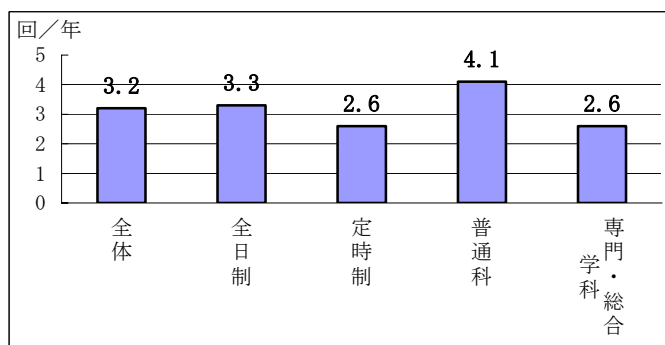
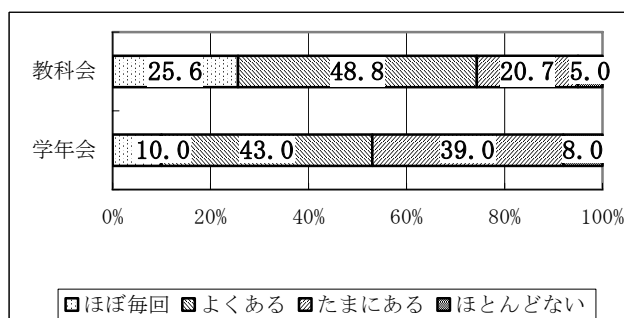


表 3 学年会、教科会で授業に関して話し合うことがありますか。



いて質問したところ、表4に示したように、86.1%の教員が学年会や教科会以外の機会を活用して、授業に関して話し合っていた。具体的には、「成績会議」「分掌部会」「担任と教科担当、主幹（主任）会議」などの組織を活用した話し合いと、それ以外の「教材研究の時間」「授業を行い疑問が生じたときに適宜」など教員相互の話し合いの機会が挙げられた。

これらのことから、教員はあらゆる機会を使って授業の内容に関して話し合っていることが分かった。

「東京都公立学校の『授業力』向上に関する検討委員会報告書」では、校内研修を次のようにとらえている。

① 校長の育成計画に基づいて教員が行う研究・研修のうち、学校内の職務の遂行を通して行われるものを「校内研修」ととらえる。

② これまで、研究・研修のためには特別な内容と特別な時間設定が必要であると考えられる傾向があった。しかし今後は、研修を主として「職務の遂行」を通じて行われるととらえるべきである。

③ 学校として統一した主題を設けて研修をすすめる際には、すべての教員が、自己の「授業力」向上に関する個別の目標を併せ持って取り組むようにすることが大切である。本研究部会では、教員が授業に関して話し合っている、あらゆる機会を活用し、教員一人一人に自己の「授業力」を向上させるとともに、より明確な目標意識をもたせていくことのできる研修の在り方を構築することが必要であると考えた。

(2) 「授業力」に関する意識について

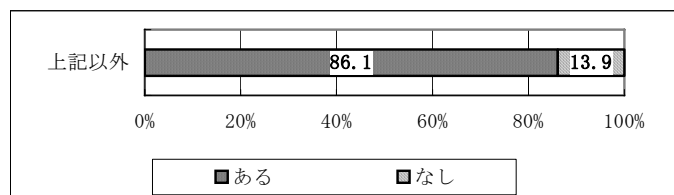
東京都公立学校の「授業力」向上に関する検討委員会では、教員の資質・能力のうち、特に実際の授業の場面において具体的に発揮されるものを「授業力」ととらえ、その構成要素を以下のⅠ～Ⅵの項目に整理している。

授業力Ⅰ：使命感、熱意、感性…豊かな感性を身に付け、教員の職責を自覚し、困難な状況・課題に挑む姿勢。

授業力Ⅱ：児童・生徒理解…一人一人の児童・生徒を大切にしようとする愛情。

授業力Ⅲ：統率力…児童・生徒の集団をまとめ、リードする力。児童・生徒を惹きつける力。

表4 学年会、教科会以外で授業について話し合うことがありますか。



【自由記述】

- ・ 成績会議
- ・ 分掌部会
- ・ 担任と教科担当、主幹（主任）会議
- ・ 授業の実施前と実施後
- ・ 数名の教員による授業の進め方や生徒の反応について話し合うための放課後の時間
- ・ 自主的な研究会
- ・ 授業を行い問題や疑問が生じたとき
- ・ 授業の空き時間
- ・ 配慮を要する生徒の指導についての情報交換を適宜行う
- ・ 職員室、準備室などで自然に

授業力Ⅳ：指導技術（授業展開）…「わかる授業」「もっと学習したくなる授業」を実現する技能。

授業力Ⅴ：教材解釈、教材開発…教科や関連する学問等に関する深い識見。

授業力Ⅵ：「指導と評価の計画」の作成・改善…常により授業を求めていく、改善の意欲。

そこで、これらの「授業力」の構成要素を基に、「授業力」向上に関する教員の意識と、授業における課題が生じたときの解決方法について調査した。

まず、教員の意識として『「授業力」の各構成要素について、授業を行う上でどのように感じているか』について質問したところ、表5に示したように、すべての構成要素について、60%以上が「十分」もしくは「ほぼ十分」と自己評価している。特に「Ⅱ：児童・生徒理解」が87.9%、「Ⅰ：使命感、熱意、感性」が85.4%、「Ⅵ：『指導と評価の計画』の作成・改善」が83.0%と高かった。このことから、教員としての責任を自覚し熱心に授業を行っていると考えていることが分かった。

次に、「授業を行う上で各構成要素の達成度に不安を感じたときの解決方法」について質問したところ、表6に示したように、「生徒に聞く」「他の教員に相談する」「教材研究」といった解決方法は、50%以上と高いものの、「授業を見てもらう」「管理職、教科代表に聞く」という解決方法は、20%以下であった。

『「授業力」を向上させるために効果的であると考えられる機会』について質問したところ、表7に示したように、

表5 授業力の各構成要素について授業を行う上でどのように感じていますか。

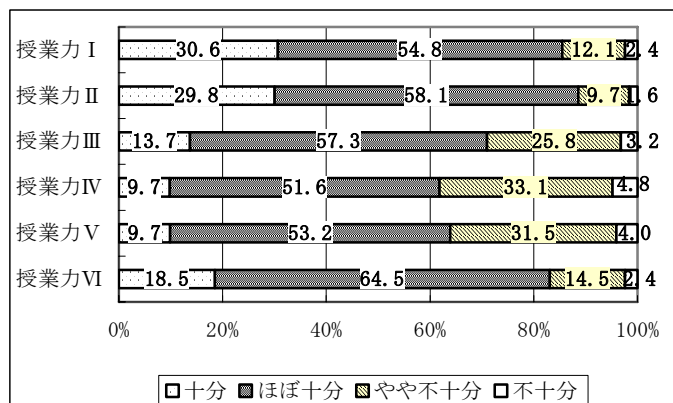


表6 授業を行う上で各構成要素の問題が生じたとき、どのように対処していますか。

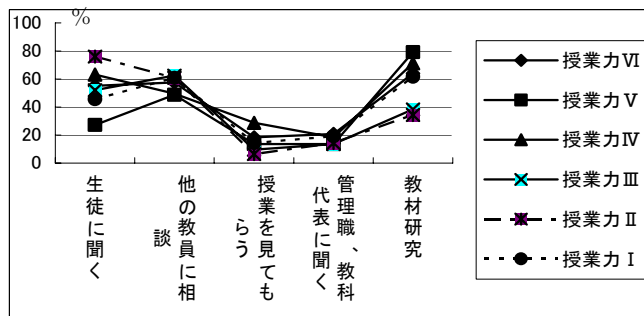
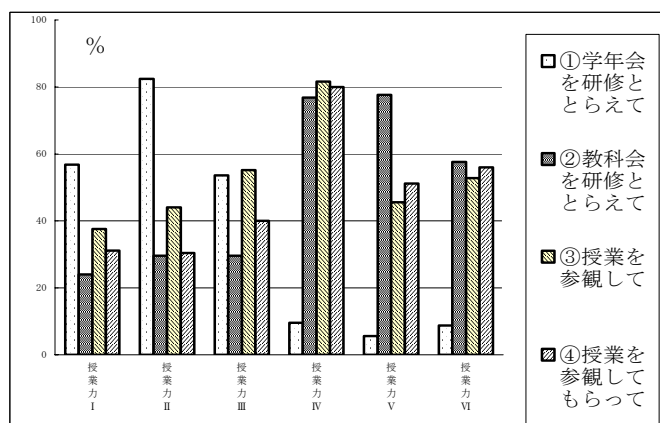


表7 次の機会で、「授業力」Ⅰ～Ⅵの構成要素のうち向上するものはどれだと思いますか。

- ①学年会を研修ととらえて
- ②教科会を研修ととらえて
- ③他の教員の授業を参観して
- ④他の教員に授業を参観してもらって



学年会では、「Ⅱ：児童・生徒理解」、「Ⅰ：使命感、熱

意、感性」、「Ⅲ：統率力」を、教科会では、「Ⅴ：教材解釈、教材開発」、「Ⅳ：指導技術（授業展開）」、「Ⅵ：『指導と評価の計画』の作成・改善」を向上するものとして挙げている。

また、「他の教員の授業を参観すること」と「参観してもらうこと」は、「授業力」の構成要素の「Ⅳ：指導技術（授業展開）」、「Ⅵ：『指導と評価の計画』の作成・改善」、「Ⅴ：教材解釈、教材開発」、「Ⅲ：統率力」の順に向上させるために有効な機会であると考えていることが分かった。

しかし、「この1年以内の、他の教員の授業の参観経験」について質問したところ、表8に示したように、どの授業参観機会についても、「ない」あるいは「いないのでできない」と回答している教員が50%以上であり、授業参観をしている機会が多いとは言えない。

これらのことから、教員は、「他の教員の授業を参観すること」や

「参観してもらうこと」の授業の相互参観が「授業力」の向上に有効であると認識しているものの、授業の相互参観が十分にはできていない状況であることが分かる。そこで、学年会、教科会などにおいて、授業研究を効果的に設定し、実施することが必要であるとする。

(3) 勤務時間の仕事の割り振りと不足感について

業務の時間の割り振り、割り振りに対しての不足感を把握するために、学期中の業務内容を「授業」「授業準備」「各種会議」「校務分掌業務」「生徒指導」「部活動指導」に分け、「1週間（勤務時間40時間）の時間配分」について質問したところ、表9に示したように、主幹の校務分掌業務に充てる時間を除き、経験年数による時間配分の差はほとんどみられない。さらに、勤務時間内での授業時間は平均15.2時間、授業準備は平均7.8時間となっている。

これに対し、業務に充てる時間の不足感については、表10に示したように、不足感の割合が一番高いのは「授業準備」で平均69.0%であった。年代別で見ると、最も高いのは11～15年目の教員で89.5%、また最も低いのは31～35年目の教員で57.1%であった。二番目は「生徒指導」で平均48.7%であった。年代別で見ると、最も高いのは11～15年目の教員で68.4%、また最も低いのは31～35年目

表8 この1年以内で、他の教員の授業を参観されたことがありますか。

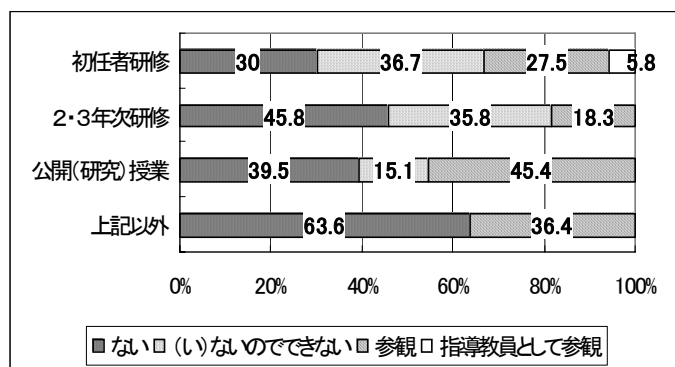
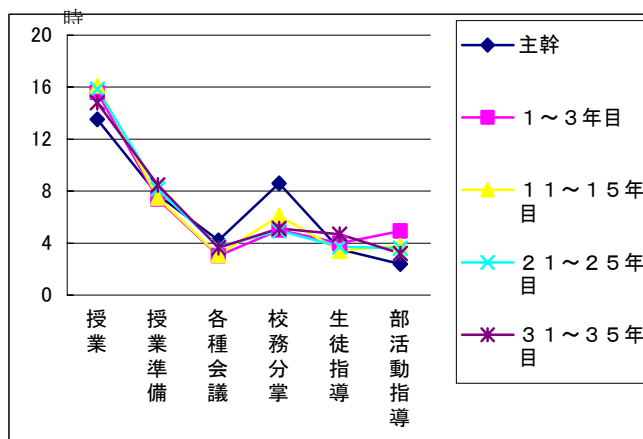


表9 学期中の1週間の勤務時間（40時間）の業務内容の内訳について次の内容を合計40時間になるようにお答えください。



の教員で 28.6%であった。三番目は「部活動指導」で平均 31.1%で、年代別で見ると、最も高いのは 1～3 年目の教員で 40.9%、最も低いのは 31～35 年目の教員で 14.3%であった。

これらのことから、11～15 年目の教員を中心に「授業準備」、「生徒指導」、「部活動指導」などにかかわる業務に対して不足感をもっている。特に、教員として最も大切な「授業準備」に充てる時間の不足感が高いことが分かった。

(4) 効果的な校内研修の在り方について

各学校での「授業力向上のための小グループの校内研修」をより推進していくために、本研究部会では効果的な研修の在り方についても調査した。

まず、「授業に関する情報交換・意見交換の機会を設ける場合の効果的な教員構成」について質問したところ、表 11 に示したように、「年代の異なる教員」が 72.1%で最も多く、次いで複数教科 63.3%、同一教科 55.8%となり、年代の近い教員 21.8%は他に比べ極端に少ない割合であった。

このことから、年代の異なる教員間で、同一教科あるいは複数教科で情報交換・意見交換を行うことが効果的であると考えていることが分かった。

次に、「授業に関する情報交換・意見交換の機会を設ける場合の効果的な構成人数」について質問したところ、表 12 に示したように、

表 10 上記項目で、不足していると感じている時間があれば、該当するものに全て○をつけてください。

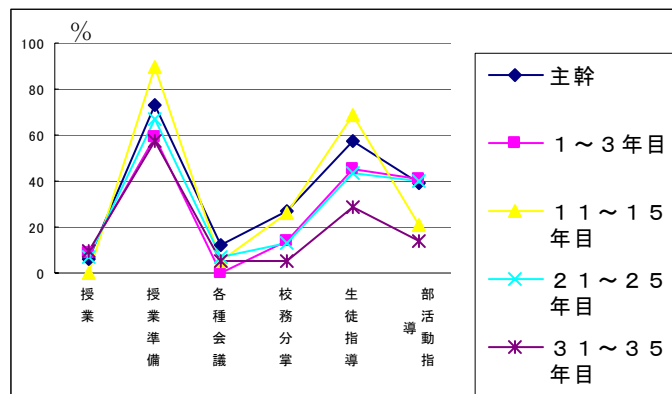


表 11 授業に関する情報交換・意見交換の機会を設ける場合、どのような教員で構成したら、効果的だと思いますか。

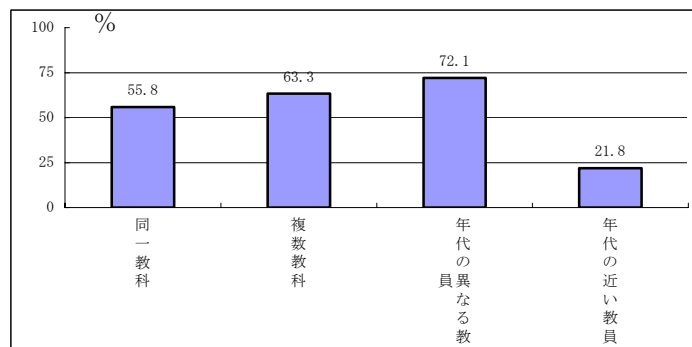
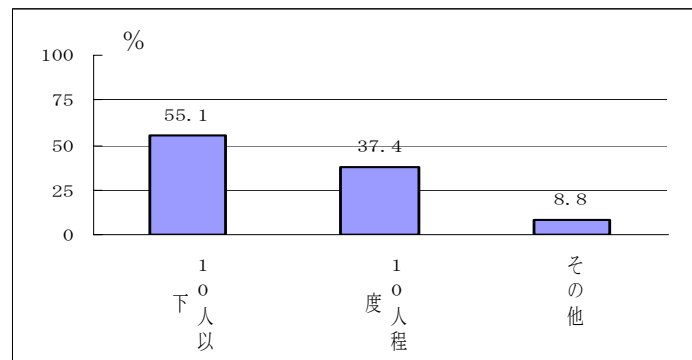


表 12 授業に関する情報交換・意見交換の機会を設ける場合、どのような人数でグループを構成したら、効果的だと思いますか。



「10人以下」が55.1%と最も多く、次いで「10人程度」が37.4%であった。このことから、10人以下の少人数で、グループを構成することが効果的であると考えていると言える。

「授業に関する情報交換・意見交換の機会を設ける場合の頻度」について質問したところ、表13に示すとおり、「各学期に1回」が52.4%と最も多く、次いで「毎月1回」が31.3%で、頻度が多くなるにつれて、割合が低くなるとともに、「年間1回」も5.4%と低いことが分かった。

さらに、「授業に関する情報交換・意見交換の機会を設ける場合の時間」について質問したところ、表14に示したように、「放課後」に行うが42.9%、「定期考査中」に行うが39.5%と同程度であった。

なお、自由記述の中には、「時間割の中に組み込む必要がある」「共通理解を必要とする状況のとき、いつでも情報交換や意見交換ができる体制を構築する必要がある」といった意見もあった。

これらのことから、教員は「校内研修」の在り方として、研修内容によって、小グループの構成や設定する回数を吟味し、「授業力」向上を目的に、より効果的な研修形態の工夫が必要であると考えていることが分かった。また、授業研究を中心に研修内容の充実を図ることが大切である。

次に、『授業力』の向上に関しての『校内研修』を効果的に行うために必要なことを質問したところ、表15に示したように、「授業研究の

表13 授業に関する情報交換・意見交換の機会を設ける場合、どのような頻度で行いたいと思いますか。(1回/期間)

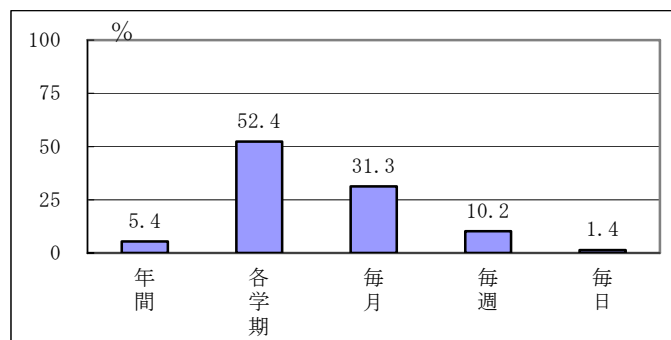
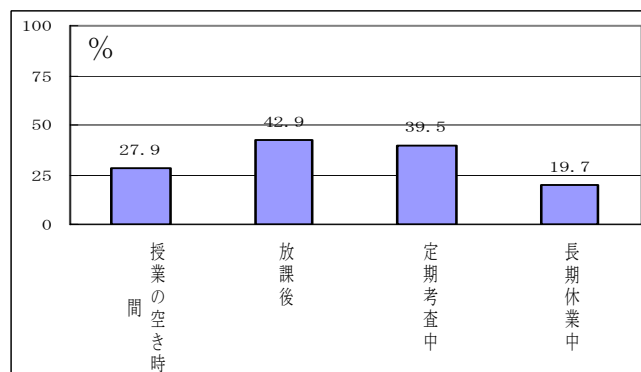


表14 授業に関する情報交換・意見交換の機会を設ける場合、どのような時間に行いたいと思いますか。



【自由記述】

- ・時間割の中に入れる。
- ・参加者の都合がつく時間帯。
- ・いつでも、早いうちに。
- ・問題が生じたとき臨機応変に。

表15 「授業力」の向上に関する校内研修について、効果的かつ実りあるものにするための御意見をお聞かせ下さい。

○意識について

- ・必要性、重要性を正しく認識すること
- ・「生徒による授業評価」を前向きにとらえる心が必要
- ・「校内研修」を立ち上げる前に、教員の意欲を十分に高めしておくこと

○校内の環境について

- ・授業参観しやすい職場の雰囲気をつくること
- ・普段からお互い相談しあえる職場をつくること
- ・日常業務の整理による研修時間の確保

○注意点

- ・生徒の実態に即した研修であること

必要性や重要性を正しく認識すること」「『校内研修』を立ち上げる前に、教員の意欲を十分に高めておくこと」など、教員自身が意識を変革していくことや、「授業参観しやすい職場の雰囲気をつくること」「日常業務の整理による研修時間の確保」などの校内の環境整備を図っていくことなどが大切であることが分かった。

また、「自己の『授業力』向上のために取り組んでいること」を質問したところ、表 16 に示したように、「生徒との会話を多くすること」などの生徒理解を深めるための取組みが挙げられた。また、「授業を見せ合い、互いの授業に関して意見交換」「担任との情報交換」

などの、他の教員との意見交換や情報交換を行うことや、「生徒の反応や評価を真摯に受け止めること」など、多くの授業に関する取組みが挙げられた。さらに、「目標設定をすること」「研修会の定期的な実施を行うこと」などで、自己の「授業力」を高めていることが分かった。

4 まとめ

アンケート結果から、効果的な校内研修の在り方として、次の 4 点が必要であると考えた。

- (1) 教員が授業に関して話し合っている、あらゆる機会を活かしながら、教員一人一人に自己の「授業力」を向上させるためのより明確な目標意識をもたせていくこと
- (2) 「他の教員の授業を参観すること」と「参観してもらうこと」の「授業の相互参観」が、「授業力」の向上に有効であることから、授業を「見る」「見られる」校内研修を行っていくこと
- (3) 教員は、「授業準備」「生徒指導」「部活動指導」にかかわる業務に対して不足感をもっており、これらを解決するために「各種会議」「校務分掌」のより一層の効率化を図ること
- (4) 校内研修は、10 人以下の「少人数」で、同一教科または複数教科による、経験年数の異なる教員で構成し、同時に、実施にあたっては、授業の空き時間を積極的に活用するとともに、研修が即座に検証できるような回数にすること

これらのことから、学年会や教科会などの小グループを活用して、授業を「見る」「見られる」校内研修を行うことで、より教員相互の授業に関する情報交換や研鑽が効果的に行われる。そのことにより、教員一人一人の授業改善が図られ、学校全体の教育の質が向上し、生徒の学力がより一層向上すると考えられる。

表 16 自己の「授業力」のために取り組まれていることをお聞かせ下さい。

- 生徒理解に関すること
 - ・生徒との会話を多くすること（コミュニケーション）
 - ・生徒の状況をよく観察すること
- 授業に関すること
 - ・授業を見せ合い、互いの授業に関して意見交換をすること
 - ・生徒の反応や評価（「生徒による授業評価」）を真摯に受けとめること
 - ・教材研究をすること
 - ・識見を身に付けるために専門書を読むこと
 - ・担任との情報交換をすること
- その他
 - ・目標設定をすること
 - ・各研修へ参加すること
 - ・他校の実践例を見ること
 - ・様々な分野の本を読むこと
 - ・研修会の定期的な実施を行うこと

Ⅲ 小グループによる校内研修

1 はじめに

本研究部会では、校内研修の現状及び校長と教員の校内研修に対する考え方を調査した結果、小グループを活用して、授業を「見る」「見られる」校内研修を行うとよいことが分かった。このような校内研修を実施するには、研修組織の構築が必要である。そのためには、各学校の教育目標や学校経営計画を踏まえ、学校での職務を通して行う校内研修をコーディネートする教員（以下「コーディネーター」とする）を決めて、組織的に推進していくことが大切である。また、小グループは、学校の教育経営の方向性に即した研修内容を設定して、校内研修を実施していくことが重要である。

そこで、本研究部会では、組織的な研修を推進するためのコーディネーターの役割と、小グループで行う校内研修の方法について検討するとともに、3本の実践事例と2本のモデルを作成した。

2 組織的な校内研修を推進するコーディネーターの役割

コーディネーターは、マネージメントサイクル（PDCAサイクル）に従って、以下の5点の役割を果たしていく必要がある。（図2「コーディネーターの役割」参照）

(1) 校内研修の明確な基本方針の提示

コーディネーターは校内研修の基本方針を明確に提示していく必要がある。基本方針を示す際には、学校の教育目標、校長の学校経営計画を踏まえて、学校全体で目指す生徒像の共通理解を図り、その実現に向けた校内研修となるように調整を図ることが重要である。

(2) グループ構成の工夫

校内研修を効果的に行うには、「授業力」の6項目の構成要素を向上させる視点から、小グループを構成する必要がある。その際、本研究部会のアンケート結果から、10人以下の教員数で、同一教科または複数教科の担当教員、教職経験年数の異なる教員、「学年会を中心としたグループ」、「教科会を中心としたグループ」、「校務分掌を中心としたグループ」、「共通の研修テーマをもった教員のグループ」など、様々な構成を考えて小グループを作っていくことが大切である。

(3) グループの年間計画と個々の教員の課題の設定

コーディネーターは、各グループが円滑な運営が行われるように調整をしていく必要がある。そこで、構成されたグループの責任者（以下「グループリーダー」とする）を指名し、グループリーダー会等を設置して、年度当初にグループに研修の年間計画を示させる。グループリーダーは、研修テーマ、内容、授業参観、情報交換や意見交換の日程について、教材研究の時間や放課後の時間などを確保する体制をグループ内で相談して設定する。さらに、グループの教員は、これらの年間計画に基づき、自己の授業を通して取り組む課題を設定する。コーディネーターは、これらの一連の過程をグループリーダーが円滑に運営できるように、調整や相談にのり、各グループの研修テーマ、個々の教員の課題が校内研修の基本方針の実現に向けた内容となるように調整していく必要がある。

(4) 「見る」「見られる」授業参観を中心とした校内研修の実施

コーディネーターは、各グループによる「見る」「見られる」授業参観を中心とした校

内研修の実施に当たって、各グループリーダーと随時連絡を取り、研修内容や研修方法が教育目標や学校経営計画に合致しているか、年度当初のグループの年間計画通りに実施されているか、などの把握に努める。把握方法として、学期ごとに活動状況の記録を提出させたり、定期考査中などに、グループリーダー会を実施して、意見交換を行ったり、校内研修の基本方針を確認しながら研修を進めていく必要がある。また、各グループが実践した研修内容については、各グループに持ち帰り、グループリーダーが周知することにより、情報の共有化を図り、各教員の「授業力」向上を図るとともに、学校全体の授業の活性化につなげていくことが大切である。

(5) 実施された研修内容の成果と課題の分析

コーディネーターは、学期ごとに各グループが実践した研修内容を集約して、成果と課題を明らかにしていく必要がある。具体的には、コーディネーターは、学期末の職員会議等を活用して、その情報を学年別、教科別、「授業力」の構成要素など、いくつかの項目に分類し、教員全体で情報を共有・活用できるように整理して、提示していく。このことにより、すべての教員が他のグループの研修内容や実践の共有化を図ることができる。また、自分が担当する生徒の実態把握や、次年度以降の年間指導計画を作成するための情報とすることができる。また、次年度の相互の研修活動や研修方法の改善を図っていくことにも活用できる。

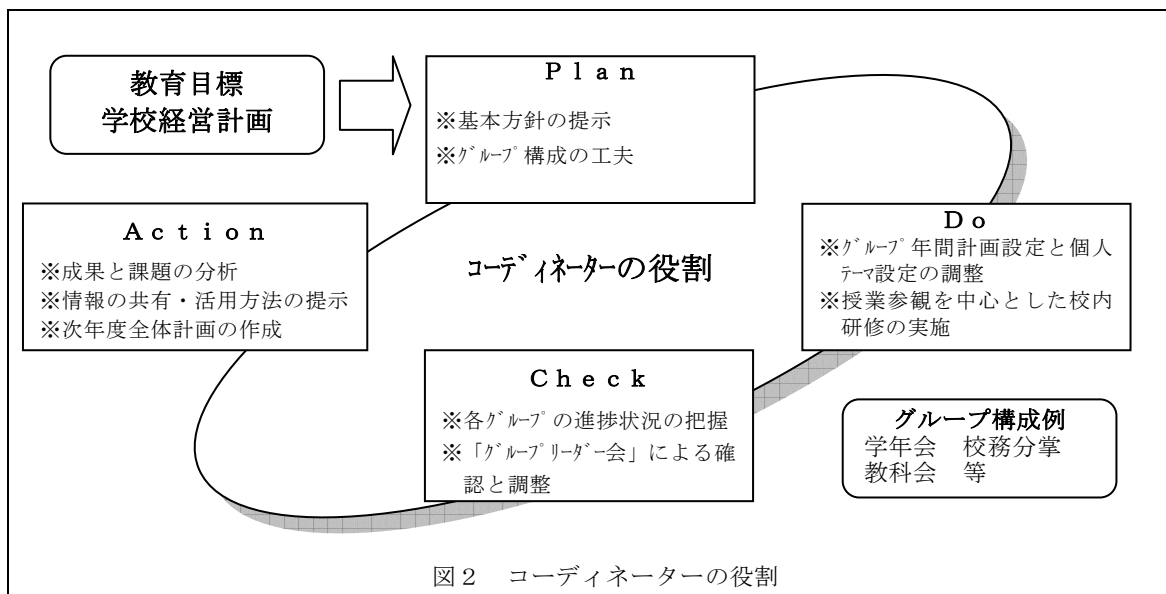


図2 コーディネーターの役割

3 小グループで行う校内研修の流れ

共通の研修テーマに基づいて編成された小グループは、グループリーダーを中心に年間を通じて以下のような研修活動を行っていく必要がある。(図3「校内研修の流れ」参照)

(1) 学期ごとの小テーマの設定

グループごとの研修テーマに基づき、教員は学期ごとの小テーマを設定し、日常の業務の中で取り組んでいく。たとえば、生徒指導部会では「授業に遅刻しない取組み」、進路指導部会では「資格取得に結び付く授業」、第1学年は「基礎学力の定着」など、様々な研修テーマが考えられる。この研修テーマに基づいて、教員は他の教員と相談や意見交換を

行って、授業実践の中で改善する課題を設定する。

(2) 授業の相互参観の実施

今回のアンケート調査の結果から、小グループにおける校内研修の中で、教員が互いに授業を参観することが研修として有益であると言える。グループ内の教員で相談して、各教員が学期に1回程度は授業参観してもらえるように日程を調整する。また、授業参観を実施する際には、次の6点について留意することが大切である。

【授業参観の留意点】

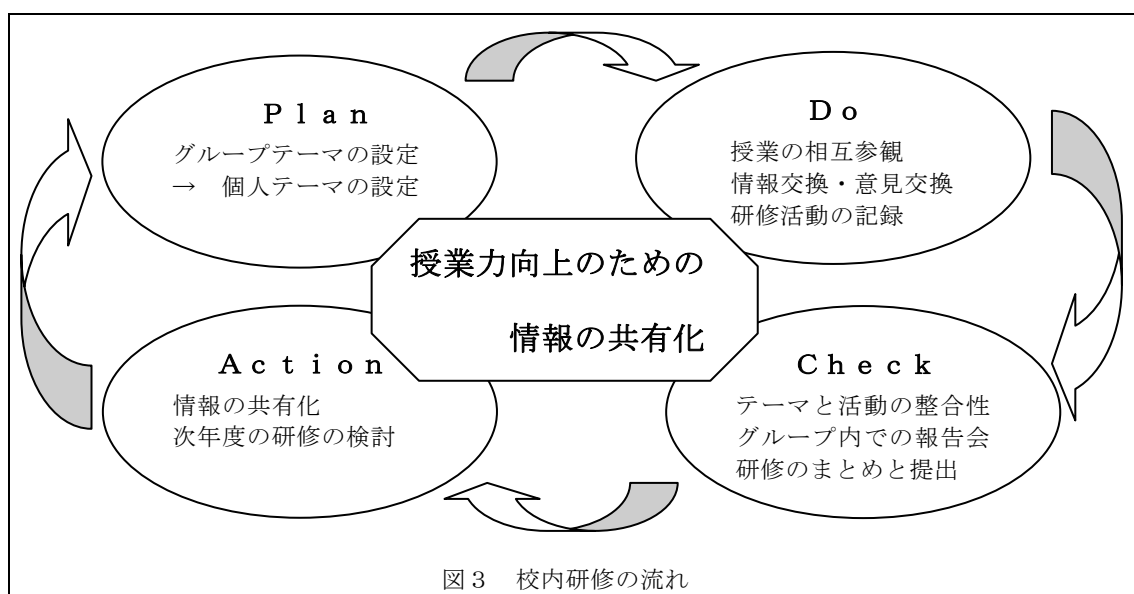
- ① 授業者の授業展開の妨げにならないよう参観すること
- ② 生徒の授業中の様子を中心に参観すること（自分の授業時の生徒の様子の違い等）
- ③ 授業者が授業で工夫している点など、自己の授業に取り入れたい点を見ること
- ④ 授業者の授業改善に活かせるように、建設的な視点で参観すること
- ⑤ 授業計画の中でのその時間の位置付けを明確にし、観点を絞って見てもらうこと
- ⑥ 生徒に授業参観の目的を説明し、普段と同様に授業に取り組ませること

(3) 校内研修の実施

授業参観を実施した後、グループの教員で校内研修を実施していく必要がある。その際、グループリーダーは、授業者による自己評価と、授業を参観した教員からの意見や感想などを出し合って、授業者やグループ内の教員の授業改善や課題解決に活かせる建設的な情報交換や意見交換ができるようにしていくことが大切である。また、グループ内の各教員が設定したテーマに即して研修を行っているかを適宜検証していくことも必要である。さらに、夏季休業期間等を活用して、日常の校内研修の成果を生かした模擬授業等の研修を行うなどの工夫をしていくことも大切である。

(4) 校内研修での成果と課題の整理

グループリーダーは、グループによる校内研修の成果と課題について、学期ごとに活動記録等を基に集約して、コーディネーターに提出する。このことにより、他のグループの研修の成果や課題の情報を共有化して、学校全体としての「授業力」向上を図れるようにしていくことが大切である。



4 事例・モデル

(1) 事例

事例1 校内分掌を中心とした校内研修

進路指導部を活用して、共通の課題を設定した校内研修の取り組み

ア ねらい

A校では、5・6時間目を活用した週3回の体験的な学習や、自己の生き方や進路を考える週1時間のキャリアガイダンスを実施して、生徒の基礎学力の向上と進路実現に向けた取り組みを行っている。このため、すべての教員が専門教科の外に週2時間から7時間の様々な体験的な学習の授業やキャリアガイダンスの企画・運営を行っており、これらの事前の準備や事後の整理に時間を要している。

また、A校の進路指導部は、専属として2名の教員と1名の嘱託員、学年担任との兼任で6名の教員が所属し、合計9名が指導にあっている。学年担任を兼任している教員は、職員室では学年担任として生徒への対応や指導、保護者との連絡や面談などを行い、進路指導室では3学年生徒への進路相談や進路指導、事業所との連絡、来客への対応、進路資料の整理、進路部行事の企画・運営に携わっている。同様に、教務部や生徒部、総務部などの他の校務分掌においても、ほとんどが学年担任との兼任となっている。

このような状況のため、校務分掌の教員ですら、全員そろって定期的に校内研修をしていくことは容易でない。そこで、「進路指導部の9名の教員の中で、集まりやすい4～5名程度の小グループを作り、進路指導部としての共通の進路指導上の課題を設定して研修を行うことで、進路指導部の目標の実現と教員一人一人の『授業力』の向上が図れるであろう。」という仮説を立てた。

イ 「授業力」向上の主な構成要素

「使命感、熱意、感性」、「統率力」、「指導技術（授業展開）」、「教材解釈、教材開発」の向上が見込める。

ウ 取り組み

① 共通の進路上の課題の設定とグループの構成について

最初の進路指導部会で、共通した進路指導上の課題を設定して、進路指導部会の職員を小グループに分け、情報交換・意見交換を行い、機動性のある研修を行っていく。

具体的には、進路指導部会で話し合い、進路指導部の目標である「生徒の卒業時の進路決定率を大幅に高める」を実現するため、「生徒の基礎学力の向上を図ることが重要である」という共通した進路指導上の課題と、自己の「授業力」向上に関する個別の目標を設定した。また、進路指導部の教員9名を約半数の4名と5名の小グループに分けることにした。1グループは、英語科2名、数学科1名、家庭科1名による構成で、初任者が1名、教員経験4年目～10年目2名、主幹1名である。もう1グループは、社会科2名、理科2名、家庭科1名による構成で、教員経験11～20年目3名、21年目以上1名、嘱託員1名である。

② 小グループによる校内研修と相互の授業参観の実施

校内研修のための特別な時間を設定せず、進路指導室での月1回の進路指導部会や、

様々な打ち合わせの時間の中に、小グループに分かれて共通した進路指導上の課題と、自己の「授業力」向上に関する個別の取組みについての情報交換・意見交換の時間を短時間でも意識的に設定するようにした。この中で、教員は具体的な授業での取組みでの工夫点や悩みを話すとともに、次回の授業の日程や内容を説明するようにした。また、他の教員に授業参観してもらったり、他の教員の授業を参観したりして、互いの授業力の向上を図るようにした。さらに、小グループでの研修のまとめをするため、学期に1回は進路指導部として校内研修の時間を設定した。

③ 配慮事項

これらの取組みを行う上で、次の5点に配慮していくことが大切である。

【配慮事項】

- a 共通した進路指導上の課題と自己の「授業力」向上に関する個別の目標を設定すること
- b 既存の会議や話し合いに、意図的に研修の時間を設定していくこと
- c 授業参観の予定を事前に互いに立て合い、伝え合うこと
- d 授業参観では、自己の授業に取り入れたい点を中心とした記録を取ること
- e 授業参観では、授業活動に影響を与えないよう配慮して参観すること

エ 結果と今後の課題

共通の進路上の課題と、自己の「授業力」向上に関する個別の目標を設定したことで、話し合いの中で課題意識の明確化と共有化が一段と進み、教科の指導計画の再検討や次年度の年間計画を考え直していく「使命感」が高まった。また、授業のねらいが鮮明になっていくことで、授業の展開を考えやすくなったとの意見も得られた。

グループでは、4名から5名の小グループに分けたことで、情報交換や意見交換を積極的に行うことができた。特に、グループ構成では、年代の異なる教員間で、複数教科であったため、専門教科の授業の検討にとどまらず、各教科の担当教員が教科、体験的な学習の時間やキャリアガイダンスの時間との連携を図りながら、学校全体として基礎学力の向上に取り組む必要があるとの認識が高まった。

相互の授業参観では、互いの取組み方を知ると同時に、生徒の意外な一面を見ることができ、「生徒理解」も図ることができた。授業参観後の話し合いで、生徒の視覚・聴覚に働きかける授業、生徒の参加と活動を重視した授業など、様々な授業の工夫がされており、自己の授業改善に参考になったとの意見が出された。また、生徒の観察や発問の仕方など、「指導技術」の共有化も進んだ。

課題としては、4～5名の小グループで構成したが、教員は様々な日常業務に追われ、授業を「見る」「見られる」校内研修を実施することが難しかった。また、進路指導部として、十分な取組みには発展することができなかった。今後は、校内研修担当組織を設置して、学校の教育目標や学校経営計画の下で、学校として組織的に取り組む体制を構築していく必要がある。また、これらの組織を活用して、互いの授業を「見る」ためのきっかけ作りや条件を整備するとともに、日常業務のさらなる効率化を図っていくことが大切である。

事例2 教科準備室を活用した校内研修（OJT）の工夫

理科の準備室における実習助手を中心とした日常的な校内研修（OJT）の取り組み ア ねらい

B校の生物・化学準備室には、化学と生物の教員が各1名、実習助手1名、嘱託員1名（化学）の計4名の教職員がいる。教員2名はいずれも40歳台の中堅教員で、実習助手は20歳台前半の若手で、教員になることを目指している。B校には生物の教員がほかに1名いるが、準備室の広さや校務の都合上、主に職員室にいる。カリキュラムの編成上、生物の教員が化学など専門以外の科目も担当しなければならない状況がある。このため、本来、教科会を時間割の中に組み込むなど、教科全員で定期的に研修していくことが望ましい。

しかし、学校の規模・学科にもよるが、教科の人数が5名を超えると、教科会を時間割に組み込んで、教科全員が定期的に集まることが容易なことではない。理科の場合、準備室単位であれば、人数も少なく、日常的に意見交換・情報交換を行うことが可能である。また、B校の生物・化学準備室の両隣には、化学、生物の各実験室があり、授業の相互参観も行いやすい。

そこで、「準備室において、日常的に授業、特に実験を中心に意見交換・情報交換を行うことにより、教員一人一人の授業改善・充実が図られ、教科として『授業力』が向上し、生徒の学力がより一層向上するであろう」という仮説を立てた。

この仮説に基づき、本事例研究では、次の3点のねらいを設定して、校内研修を行った。

- ① 異動1年目でも、実験内容・ポイントを把握できるようにする。
- ② 実験を中心に、専門分野の授業改善を図れるようにする。
- ③ 科目間の関連分野の情報を相互に提供して、情報の共有化を図れるようにする。

イ 「授業力」向上の主な構成要素

「指導技術（授業展開）」、「教材解釈、教材開発」、「『指導と評価の計画』の作成・改善」を中心に、「児童・生徒理解」の向上が見込める。

ウ 取り組み

- ① 実験プリントのファイリングと実験ノート作成

B校では、各教員が実験プリントを作成して実験を行っている。実習助手が、科目ごとに実験プリントをファイリングして、ポイントなどを押さえた実験ノートを作成している。これらの実験プリントのファイリングと実験ノートは、実習助手の職務を遂行する上で必要なだけでなく、教員が閲覧することにより、他の教員の実験教材・授業展開について知ることができる。このため、異動1年目でも、実験内容・ポイントが把握できるようになっている。

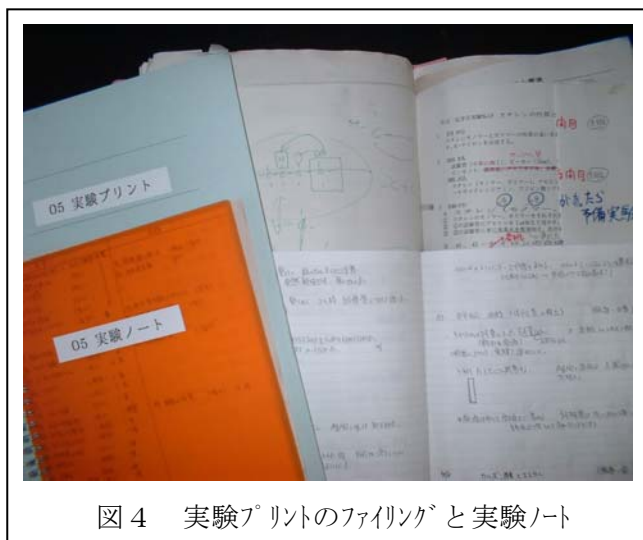


図4 実験プリントのファイリングと実験ノート

② 日常的な情報交換・意見交換（相互研鑽）

東京都公立学校の「授業力」向上に関する検討委員会報告書では、「研修の進め方については、日常的に短時間でやる情報交換・意見交換を重視する。」としている。教科会という特別な時間を時間割の中に設定できなくても、準備室で、休み時間や空き時間等を活用して、他の教員と話し合うことで、教員一人一人の授業改善・充実を図ることができる。

具体的には、生物・化学準備室にいる4名の教職員が、各自が事前に実験プリントや実験ノートを開覧して

おき、疑問点等について、休み時間や空き時間等を活用して、意見や情報の交換を行うことで、科目間の関連分野の情報を相互に提供して、情報の共有化を図るようにする。また、実習助手は、実際に各教員と一緒に実験の授業を行っているので、それぞれの実験の良い点や改善すべき点をとらえている。そこで、実習助手を中心とした情報や意見交換を行うことで、実験を中心に、専門分野の授業改善を図るようにする。

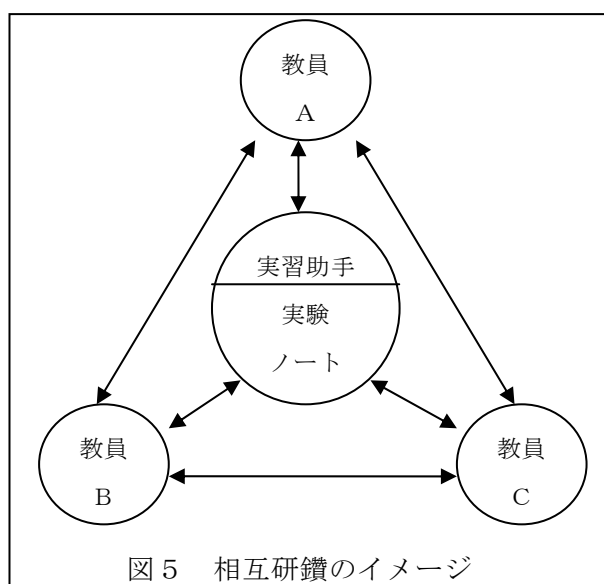


図5 相互研鑽のイメージ

③ 配慮事項

これらの取組みを行う上で、次の5点に配慮していくことが大切である。

【配慮事項】

- 普段から相談しやすい環境を整えておくこと
- 意見交換・情報交換する内容は、生徒の実態に即した内容であること
- 話し合った内容は、実際の授業（実験）に採り入れ、結果として残していくこと
- 専門以外の教員が実験を行いやすいように、建設的な意見交換を行うこと
- 実験では「安全」について考え、生徒の取組みや感想を授業改善に活かすこと

エ 結果と今後の課題

実験プリントのファイリングや実験ノートを開覧できるようにしたことで、異動1年目でも1年間の授業の流れを把握し、その学校の教育目標と学校経営計画に合わせ、生徒に適した実験を行うことができるようになった。また、実習助手が異動した場合でも、実験の準備を的確に行うことができる体制を構築することができた。

教員相互が、休み時間や空き時間等を活用して、意見交換・情報交換を行うことで、同じテーマの実験でも様々な実践例について研修でき、改善した実験を行うことができた。この結果、生徒の実験報告書には「講義だけより、実験を行うと考えが深まり、よく分かった。」という感想が今までより多くみられた。このことにより、教科教育の質の向上が図られ、生徒の実験に対する学習意欲を高めることができた。

「もっとよりよい授業をしたい」という課題意識をもち続けるとともに、今後は校内だけではなく、外部の機関などの教員との意見交換・情報交換も行っていく必要がある。

事例3 共通の研修テーマをもった教員による小グループの校内研修

保健体育科と家庭科の教員が連携して、授業力の向上を図る取組み

ア ねらい

C校では、「保健」を第1・2学年で各1単位、「家庭総合」を第2・3学年で各2単位、必履修科目として設定している。第2学年の「保健」では、「(2)生涯を通じる健康」の「A生涯の各段階における健康」で結婚生活と健康について学習させている。また、「家庭総合」では、「(2)子どもの発達と保育・福祉」の「A子どもの発達」で、子どもを生み育てることの意義等について学習させている。このように、教科・科目の学習では、相互に関連の深い内容を、これまで保健体育科の教員と家庭科の教員が学習内容について連携を取り合って、授業を展開することはなかった。

そこで、「同じ学年を担当する保健体育科と家庭科の教員が連携を図り、関連の深い学習内容について、指導展開等の情報交換や意見交換を行うことで、個々の教員の『授業力』の向上が図られ、生徒の学習内容への理解がより深まるのであろう」という仮説を立てた。

イ 「授業力」向上の構成要素

「指導技術（授業展開）」、「教材解釈」、「『指導と評価の計画』の作成・改善」を中心に「児童・生徒理解」の向上が見込める。

ウ 取組み

① 保健体育科と家庭科の教員による共通のテーマの設定

保健体育科と家庭科の教員が、昨年度と今年度の年間指導計画を基に、授業の指導展開や教材解釈など、「授業力」向上のための情報交換や意見交換の場を設定した。（図6参照）

	保 健	家庭総合	研修
5月第4週			「テーマ」の確認
6月第1週	健康な結婚生活	母体の健康管理	情報・意見交換
6月第2週	生命の誕生	子どもの発達と生活環境	授業参観
6月第3週	受精・妊娠・出産と健康問題	親の役割と子どもの発達	情報・意見交換
6月第4週	家族計画	家庭の役割	情報・意見交換
7月第2週	定期考査	定期考査	考査結果の確認

図6 「保健」と「家庭総合」の授業計画

これらの情報交換や意見交換から、「保健」と「家庭総合」の単元の中に、相互に関係の深い内容があることが分かった。しかし、これまで、各担当教員の年間指導計画に基づき授業が行われており、教える時期や内容の重複などがあった。そこで、これらの内容について、保健体育科と家庭科の教員が連携を図り、同じ時期に行うとともに、内容の関連を図ることで、生徒の学習内容への理解が深められるように工夫することにした。

具体的には、第2学年を担当している保健体育科と家庭科の教員が、共通のテーマとして「『生命の誕生』の尊さ」を設定して、図6に示す授業計画を立て、授業実践を行った。

「保健」では、健康な結婚生活として、受精、妊娠、出産とそれに伴う健康問題や、家族計画の意義と人工妊娠中絶の心身への影響などについて説明し、「家庭総合」では、妊娠から子どもの誕生までの母子の健康管理、乳幼児期は一生を通じての人間の発達の基礎をつ

くる最も重要な時期であることなど、出産後の育児・家庭の役割について授業で取り上げていくこととした。

② 授業参観でのポイントを絞るための観点表の活用

互いの授業を参観し合うように努めた。その際に、授業参観でのポイントを絞るため、表 17 のような観点表を用意した。この観点表を基に、授業参観後に東京都公立学校の「授業力」向上に関する検討委員会報告書にも示されているように、日常的に短時間で行う情報交換・意見交換を重視する場を設けるようにした。具体的には、昼休みの時間など、職員室に教員が在室しているときに実施して、生徒の様子、授業の進捗についての情報交換を行い、今後の授業に生かせるようにした。



図 7 授業参観の様子

③ 配慮事項

これらの取組みを行う上で、次の 4 点に配慮していくことが大切である。

【配慮事項】

- a 教科・科目の学習内容を検討して、共通のテーマを設定すること
- b 週に 1 回は必ず、授業や生徒の学習状況を確認し合う場を設定すること
- c 意識的に相互の授業参観をしていくように努めること
- d 授業参観後の意見交換では、建設的な意見や批評となるようにすること

エ 結果と今後の課題

今回、保健体育科と家庭科の教員が、共通の研修テーマを設定して、授業を実践するとともに、授業参観を実施したことは、互いの教材を理解し合うことは、非常に有益であった。また、授業参観の際に、観点表を活用したことで、授業を見る際に役立った。今後は、この観点表の項目を検討して、よりよいものにしていく必要がある。さらに、授業参観することで、自己の見ている生徒とは違った一面を見ることができ、より「生徒理解」につながった。しかし、生徒の第 1 学期末考査の結果からすると、「教材解釈、教材開発」の点では、まだ工夫・改善を図っていく必要がある。また、他教科の教員で、少人数で行えたことを学校全体へ還元していく校内体制を確立していくことが重要である。

表 17 授業参観の観点表

項	目	コメント
	授業に対する熱意	
	生徒の理解	
	授業をリードしていく力	
	指導技術	
	教材解釈	
総評		

(2) モデル

モデル1 担任と教科担当教員の協力による校内研修の工夫

生徒の向上心を持続させるための校内研修の取組み

ア ねらい

D 高校は、入学生の多くが入学時には大学等への進学を希望する全日制課程普通科高校で、多くの生徒が部活動にも積極的に取り組んでいる。しかし、第1学年の夏季休業日を過ぎる頃から、高校の専門的な学習内容や進度の速さに戸惑いを感じ、授業に集中できなくなる生徒もいる。

この原因として、高校の学習内容が、生徒にとっての実生活との結び付きが薄く感じられ、興味・関心がもちにくくなってしまっていることが考えられる。また、毎日の学校生活の中で、生徒の将来に対する夢や希望、その実現のための進学・就職など、長期的な視野で自分自身を考えることができにくい状況になっていることも考えられる。

そこで、「担任と教科担当教員が、ホームルーム活動と教科での学習において、生徒の自己実現を図るための共通意識をもって指導にあたれば、生徒は現在の学習活動が将来につながることを認識して、向上心を持続させることができるであろう」という仮説を立てた。

イ 「授業力」向上の主な構成要素

「指導技術（授業展開）」、「教材解釈、教材開発」、「『指導と評価の計画』の作成・改善」の向上が見込める。

ウ 取組み

① 生徒の自己実現を図るための共通テーマの設定

担任と教科担当教員からなる小グループに、進路指導部教員を加え、進路指導部の組織方針を踏まえながら、生徒の自己実現を図るための共通意識をもつため、「自分自身の生き方や在り方について短期的な目標と長期的な目標をもたせることを意識した指導を重視する」など、テーマを設定する。

② 教科の年間指導計画の再構成

このテーマを基に、担任と教科担当教員で教科の年間指導計画の再構成を行うために、進路指導部が作成した全体計画、学年及び教科の年間指導計画案を持ち寄り、指導の時期と内容を検討する。（表18参照）

③ 授業等の実践と校内研修の実施

さらに、再構築した計画に基づいて教科指導やホームルーム活動を行い、その後に指導技術、授業展開、教材解釈などを改善・充実させるための情報交換や意見交換を実施する。

④ 配慮事項

これらの取組みを行う上で、次の6点に配慮していくことが大切である。

【配慮事項】

- a 担任、教科担当教員が、それぞれの立場からの積極的な意見や情報の交換ができる環境を整備すること
- b 学校経営方針を踏まえ、柔軟に年間指導計画の改善が行われるよう、校内研修

担当教員を設置すること

- c 構成したグループには、グループリーダーを置き、グループリーダーは、研修担当教員と連携を図り、積極的に研修の調整を図ること
- d 担任は、進路指導の全体計画の中での本時の位置付けを明確にしたホームルーム活動になるように工夫すること
- e 教科担当教員は、他の教科・科目や、ホームルーム活動との関連を図った教科指導になるように工夫すること
- f 進路指導部教員は、進路指導部の長・短期的な目標を示し、生徒が向上心を高めるための目標設定の具現化を図れるように工夫すること

表 18 校内研修より作成した年間指導計画例：(第1学年)

共通テーマ：自分自身の生き方や在り方について短期的な目標と長期的な目標をもたせることを意識した指導を重視する。		1 学期	2 学期	3 学期
進路指導	進路計画	<ul style="list-style-type: none"> ・進路適性検査の実施 ・次年度選択科目説明会の開催 	<ul style="list-style-type: none"> ・進学説明会の開催 ・進路指導説明会の開催 実力テストの意義と取り組み方について	<ul style="list-style-type: none"> ・進路指導説明会の開催 実力テストの意義と取り組み方について
担任教員	ホームルーム活動	「自己を知る」 ・自己の興味・関心を知る。 「自他の違いを知る」 ・自己紹介をすることで、自分の考えを説明する。 ・他の人の考え方を知る。	「将来を考える」 ・社会や職業を知る。 ・自分の生活習慣を考える。 「実力テストのもつ意味を考える」 ・自分の学力を確認する。	「来年度の目標を立てる」 ・自分の将来のための目標を確認する。
教科担当教員	国語総合	「自己紹介」作文 ・自分を説明する文章の書き方を学ぶ。 「人の考えを読む」 ・人の考えを理解する。	「作者の意図を知る」 ・作者の時代背景を考える。 ・論理の組み立てを考える。 ・論理の組み立てを参考に	「発表(まとめ)」 ・第1学期の自分と比較する。 ・批評できる能力を身に付ける。
	数学 I	「解答の書き方」(式の計算) ・問題文の要点をつかむ。 ・自分の考えを人に理解させる方法を考える。	「グラフを描く、使う」(2次関数のグラフ) ・特徴をつかむ。 ・グラフの加工を考える。 ・グラフの見方を工夫する。	「道具を工夫する」(三角比) ・別の道具の利用を工夫する。 ・生活の場面での活用を考える。

モデル2 学年会を中心とした校内研修の工夫

第1学年担任団の「授業力」向上への取組み

ア ねらい

E校では、これまで年度当初に年間を見通した学年方針を決めて、担当学年の生徒の指導にあたってきた。特に、生徒の学習状況や生活指導上の課題は、学年会や教科担当教員との意見交換や情報交換で把握することが多い。これらの意見交換や情報交換では、担任が日頃見て、感じている生徒と違った一面を知る、貴重な場となっている。このような学年会の機能を活用して、担当学年の生徒理解を深めるとともに、担任一人一人の「授業力」の向上を図れないかと考えた。

そこで、「担任同士が互いの授業を参観することで、自分の担当していない学級も含めて、担当学年の生徒の学習への取組みや生徒の実態をより一層把握し、さらに学年会で授業参観での気が付いた点などを話し合うことで、担任一人一人の『授業力』の向上が図れるとともに、担当学年の生徒の学力がより一層向上するであろう」という仮説を立てた。

イ 「授業力」向上の主な構成要素

「使命感、熱意、感性」、「統率力」を中心に、「児童・生徒理解」の向上が見込める。

ウ 取組み

① 生徒の実態を把握するための共通テーマの設定

第1学年の担任からなる小グループを構成して、「第1学年の学年方針と授業内容の定着を図るための教科指導の手立て」などの長期的な共通の研修テーマを設定する。さらに、学期ごとの中期的な共通の研修テーマと、各学期の中間考査、期末考査までの短期的な共通の研修テーマを設定する。(表20参照)

② 共通の研修テーマに基づく、個人テーマの設定

これらの共通の研修テーマに基づいて、教員一人一人の個人テーマを設定し、グループ内でどのような視点で「授業力」の向上を図り、授業参観を行うかを検討する。具体的には、担任団は異なる科目を担当していることから、授業への「使命感、熱意、感性」「統率力」を中心として、生徒理解に視点を置いた授業参観が考えられる。

③ 授業参観と学年会を活用した校内研修の実施

各担任は自分の担当する教科の授業実践を行い、他の教員に授業参観をしてもらう。それに基づき、学年会の時間を活用して、「使命感、熱意、感性」「統率力」を中心として、「指導技術(授業展開)」など「授業力」を向上させるための意見交換や情報交換を実施する。

さらに、学期ごとに、定期考査中等の時間を活用して、教科指導の研修の場としての学年会を実施して、生徒の学習や生活面での情報交換を行い、生徒理解を深め、教科指導や生活指導に役立てる。その上で、各担任は、年度末に今年度の授業実践と生徒の学習や生活にかかわる情報をまとめ、次年度以降の教科指導と生徒指導の引き継ぎ資料として活用できるよう情報の整理をするとともに、担任団で情報の共有化を図る。

④ 配慮事項

これらの取組みを行う上で、次の点に配慮していくことが大切である。

【配慮事項】

- a 小グループを構成する教員の中からグループリーダーを決め、グループリーダーは共通の研修テーマと個人テーマの調整をすること
- b グループリーダーは、グループを構成する教員と相談・調整して、学期ごとの授業参観や研修の機会の設定をすること
- c 「使命感、熱意、感性」「統率力」など、授業者に対する授業参観の視点を定め、共通理解を図ること
- d 生徒の「学習への意欲・関心」「学習への取り組みの態度」「学習のねらいの達成状況」「学年の指導目標の達成状況」など、生徒に対する授業参観の視点を定め、共通理解を図ること
- e 授業参観を行う際には、cとdで示した授業参観の視点を記した授業参観記録用紙（表19参照）等を作成して、実施すること
- f 教科の異なる教員からなる小グループであるため、自己評価と相互評価を行い、自由な雰囲気での建設的な意見交換ができるようにすること

表19 授業参観記録用紙例

今学期のテーマ		
参観日時	平成 年 月 日 () () 時間 () 年 () 組	
	科目 ()	
		留意事項
授業への集中度	良 好 / 良 好 / 良 好 / や や / 心 配	
教材内容の理解度	良 好 / 良 好 / 良 好 / や や / 心 配	
教員の指示への反応度	良 好 / 良 好 / 良 好 / や や / 心 配	
授業者からの授業参観についての依頼内容		
参観者のコメント	(生徒について)	
	(授業者について)	
授業者の所見		

表20 年間研修テーマの計画例

年間研修テーマ	「第1学年の学年方針と授業内容の定着を図るための教科指導の手立て」	
1 学 期 テ マ	授業に集中する体制づくり	
	中間考査まで	期末考査まで
	生徒が毎日授業に集中する体制を整える	家庭学習の定着を目指した指導をする
	(個人テーマ) ○授業展開での導入の在り方の工夫 ○短時間で反復学習の指導計画の作成	(個人テーマ) ○毎回の授業後に提示する家庭学習課題の計画 ○既習事項の内容確認小テストの計画と作成
2 学 期 テ マ	基礎学力の定着	
	中間考査まで	期末考査まで
	授業内容の定着状況の見取りの工夫	反復学習の活用方法の工夫
	(個人テーマ) ○授業時に基礎事項の小テストの計画と改善 ○基礎的な学習内容を定着させるノート指導と板書の工夫	(個人テーマ) ○既習事項の確認方法の工夫と指導過程の工夫 ○考査前の模擬テストの在り方の工夫と計画
3 学 期 テ マ	第2学年（次学年）に向けての学力定着	
	学年末考査まで	第2学年に向けて
	1年間の学習内容の定着のための工夫	先取り学習を取り入れるための指導計画の工夫
	(個人テーマ) ○基本的な学習内容の応用・発展を図る指導の工夫 ○演習形式を中心とした授業の在り方の工夫と演習の作成	(個人テーマ) ○第2学年で扱う学習内容の導入とその指導計画 ○春季休業中の課題の作成と提示の仕方 ○春季休業中の生活指導の在り方

IV まとめ

本研究部会では、主題を「『授業力』向上を目指した小グループによる校内研修とその環境整備」と設定して、「学年会や教科会などの小グループを活用し、授業を『見る』『見られる』校内研修を行えば、教員一人一人の授業改善・充実が図られ、学校全体の教育の質が向上し、生徒の学力がより一層向上するであろう」という仮説を立て、アンケート調査及び校内研修の在り方についての検討を行った。

アンケート調査では、校内研修の現状及び校内研修に対する考え方を調査した。その結果、効果的な校内研修の在り方として、本報告書の10ページに示した4点が必要であることが分かった。そこで、これらの点を踏まえ、小グループによる校内研修を推進するためには、研修を推進していくコーディネーターが必要であると考え、コーディネーターの役割と、小グループで行う校内研修の方法について検討して、事例・モデルを作成した。

その結果、校内研修を実施する際の構成人数を2名から10名程度の小グループにしたことで、情報交換や意見交換を積極的に行うことができた。特に、グループ構成では、年代の異なる教員間や、複数教科など、構成を工夫したことで、教員に学校全体で生徒の学力の向上に取り組む意識が高まった。また、共通の研修テーマと、自己の「授業力」向上に関する個別の目標を設定したことで、教員一人一人が課題意識を高めることができた。さらには、学年や教科などの指導方針・計画の再検討や、次年度の年間計画を検討することにも役立った。

校内研修に授業参観を位置付けたことで、教員が互いの授業の取り組み方や、互いの指導内容や教材について知る機会になった。また、生徒の意外な一面を見ることができ、生徒理解も深めることができた。さらに、観点表や授業参観記録用紙などを活用したことで、他の教科の教員が授業を見る際の観点を明確にすることができ、授業者や生徒の状況を的確に把握することができた。授業参観後の研修では、授業者の指導方法や生徒の観察や発問の仕方など、意見交換や情報交換を具体的にを行うことができ、教員一人一人の指導技術の改善に活かすことができた。このことにより、生徒の実態に合った授業を行うことができるようになり、生徒の授業へ取り組む姿勢が高まった。

これらのことから、教員同士が、日常的に授業を見合い、現在行われている教科会や学年会などの既存の組織を活用し、効果的・効率的な校内研修を実施することで、教員一人一人の自己の「授業力」が向上され、学校全体の教育の質の向上にもつなげることができたと考えられる。

今後は、学校全体としてのコーディネーターや校内研修担当組織を設置して、学校の教育目標や学校経営計画の下で、より組織的に取り組む体制を構築していく必要がある。また、これらの組織を活用して、年間研修計画の作成、授業参観、意見交換や情報交換を行う研修会の時間などの調整を行っていくことが大切である。また、授業参観をする際の観点表や授業参観記録用紙については、今後より一層の検討を行っていく必要がある。さらに、学校全体としての校務分掌等の業務の見直しを図るとともに、コンピュータ等の活用を図り、日常の業務効率化をより一層進めるなどの工夫・改善を図っていくことが重要である。

平成17年度 教育研究員名簿（ 教育経営 ）

No.	学区	学 校 名	氏 名
1	5	都立足立東高等学校	横井 雅一
2	6	都立深川高等学校	服部 幸一郎
3	7	都立忠生高等学校	○ 門馬 誠
4	10	都立狛江高等学校	◎ 安井 弘明
5	13	都立八丈高等学校	矢島 定章

◎世話人 ○副世話人

担当 東京都教職員研修センター統括指導主事 出張 吉訓
指導主事 小塩 明伸

平成17年度教育研究員研究報告書

東京都教育委員会印刷物登録
平成17年度 第12号

平成18年1月16日

編集・発行 東京都教職員研修センター
所在地 東京都目黒区目黒一丁目1番14号
電話番号 03-5434-1974

印 刷 株式会社 今 関 印 刷